

「表現コミュニケーション」教育の推進

～「『私たちの学校』づくり」の一環として～

1 はじめに

当町の教育を進める姿勢を、早春に純白の花を咲かせる町木にちなんで「こぶし教育」としており、そこでは幼保小中高の連携や軽井沢の資源を活用した教育や軽井沢学の推進などを謳った七つの基本方針が示されている。この基本方針を具体化するための三つの教育一貫独自プログラムの概念図(図1)を町教委として令和6年度末に作成した。



図1 三つの教育一貫独自プログラム(概念図)

その中心プログラムが、町の豊かな自然・歴史・文化・人材等を活用した「軽井沢学」であり、コーディネート役を配置して実践を図っている。例えば、異なる小学校の児童が交じり合って地域課題等を学ぶ「軽井沢ゼミ」、町内に多数あるホテル・レストランのシェフ監修の「シェフ給食」、そして表題にも掲げた、演劇の仮想世界を創造することで自己肯定感を高める「表現コミュニケーション」教育などがその代表である。

2 「表現コミュニケーション」教育とは

(1) 教育活動に取り入れた経緯

「表現コミュニケーション」教育を町が取り入れた端緒は、令和5年に長野県が主催する「アート的手法を活用した学び」推進事業に、当町の2つの学校が応募し、軽井沢東部小学校が実施校になったことである。この時のプログラムは「表現とコミュニケーション」で、演劇やダンスを応用したワークショップを通じて、身体表現やコミュニケーション力、チームワーク等を高めることにつながる、というものであった。東部小学校は単級小規模校で、全校児童が140人程であるため「対話」を通して子どもたちを成長させていく場面設定や学校全体での交流(異年齢集団による活動)も行っていた。同年7月には、全校児童が体育館で一緒に活動した後、異年齢混在グループに分かれてのワークショップが実施された。実施後、先生方からは「言葉による対話の難しさや苦手さを感じているような子どもたちも、正解も不正解もない、体で表現するというテーマに、自然にチームでの対話ができ、意見を出し合い、創り上げている姿が見られた」等、好意的な意見が多かったことや、県の事業に関わったファシリテーター数名の皆さん方が当町や近隣町村関係者であり、委託できる企画会社もあったことから、令和6年度から町内の全小学校(3校)で「表現コミュニケーション」教育を取り入れることとした。

(2) 教育推進の経過と内容

① 経過

令和6年度は、全小学校5年生で2時間続きの授業を年間5回(一学期～三学期)合計10時間分を「表現コミュニケーション」(写真1)とした。各小学校で、事前に2回、

事後に1回、管理職や担任の先生方とファシリテーター等が打ち合わせを行い、指導案を作成し、事後には振り返りシートの作成と共有を行った。



写真1 「表現コミュニケーション」の一場面

令和7年度は対象を拡大して5年生の他、継続して6年生も対象とし、昨年より1回多い、年間6回、合計12時間分とし、最後の1回は全小学校5年生、6年生がそれぞれ全員、軽井沢中部小学校に集合する授業とした（写真2）。さらに小学校の先生方だけでなく、当町の小学生の多くが進学する軽井沢中学校の先生方にも2時間程度の教員研修を行った。



写真2 全小学校5年生合同の授業

② 内容

この授業の目標やねらいを「自分、仲間、先生を知りながら『自分たちの手で学校をつくっていく』意欲を高める」「非言語である身体や言葉に意図をもたせて表現力を高める」「仲間と表現、創作をすることを通し、自由な身体

表現を楽しみ、他者との意見の相違などを、対話を通して乗り越え、協力しながら前向きに課題解決へ向かう」とした。

さらに、授業を進めるうえで、「心と身体を開放して、誰にとっても安心の場になる」「自分の感じていることを知る」「仲間や先生の感じていることを知り、違う感覚や意見があることを認識し認め合う」「仲間や先生とグループで創作することで、違いを楽しみ、グループの想いや言葉を共に作り出す。またそれぞれの力が発揮されるよう全員が役割を担う」ことを大切にしたいと考えた。

また、指導上の留意点として、自発的に取り組めない児童には強制せず、彼らが表出するのを待つことや、児童ひとり一人が抱いた気持ち、考えを大切に、正解不正解はないことを、体験を通して伝えることとした。

具体的な活動は各時間異なるので詳細は紹介できないが、おおよそ1回（2時間続き）の活動の流れは以下（表1）のようなものである。

最初に	<ul style="list-style-type: none"> 「ここはどんな場所と時間?」「大切にしていること」正解不正解がない場所、自分たちで見つけていく、すべて正解、自分のことも友だちのことも「おっ!」といった発見。 「いまどんな気持ち?」腕でポーズ。「ワクワク」は上へ、「普通」は横へ、「心配」は下へ。
身体を動かしてウォーミングアップ	<ul style="list-style-type: none"> 「空間全体を歩く」自分の歩き方を感じる。その他に、月曜日の朝・金曜日の終わり・宝くじ・チケット外れ、など。二人組になり、どちらかの歩き方を真似する(リズム・スピード・体や足の動かし方など)、交代して同じことをする。 「音に体を馴染ませる」ハンガリー舞曲で体を動かす。二人組になり、一人が手のひら(指)を相手の顔(鼻)へ。相手は手のひら(指)について顔を動かす。交代して同じこと。距離を離してやってみる。音楽に乗って、自由に動かし、動かされをやる。途中交代して同じこと。 「橋と船」三人組をつくる。二人が橋、一人が船。「船」との号令で船の一人が違う橋の下へ。「橋」との号令では橋の二人が違う船の上へ。
チームで創作活動	<ul style="list-style-type: none"> 「創作」四人組をつくる。キーワード「場所」と「登場人物」を渡して、一つのシーンを創る。動画でしゃべってもよい。シェアタイム。チームで「何がみえた。」「どうしてそう思ったか」「よかったところ」をチームで話し合い出す→インタビュー(場所×登場人物)交番×忍者、学校×スパイ等。
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 「いまどんな気持ち?」腕でポーズ。最初と同じ。 「先生の感想」今日発見したこと、感想。 「振り返りシート」を書く。

表1 「表現コミュニケーション」の流れ

(3) 教育推進の効果と意義

① 効果

昨年度に引き続き実施している6年生の担任は次のような感想を述べている。「体育の授業のとき、男女関係なく、さっとグループをつくってスポーツを楽しむことがとても増えた」「今年の運動会の組体操の『自由演技の場面』で、児童が自分たちで表現を工夫し、体での表現を作り上げたときは、表現コミュニケーション授業の成果だととても感じた」「どの教科においても、グループ活動になった時に、男女関係なくグループで話し合ったり、自分の考えを述べたりするようになった」「クラスの中で、自分からものを言わなかった子が、自分の言葉で話すようになった」「クラスの中で『あの子はしゃべれない子』という固定観念がなくなった。誰でも自分なりの表現がある。それでよしという友達への理解が進んだ」

演劇という仮想の世界を創造することで、抵抗感が和らぐため、自己表現を比較的簡単に行うことができることや、他者の表現の多様性に触れること、グループで作品を創作することで他者理解や合意形成の経験や、他者からの理解や評価を得ることで、自己肯定感や達成感が得られる等の効果が期待できる。

② 意義

前述の担任の感想でわかるように「表現コミュニケーション」教育は、集団で学習や生活をする学校を、特に心理面において、安全で安心なものにする可能性を秘めている。すべての児童にとって学級等が安全・安心であれば、学級活動や児童会活動、さらには学校行事等の特別活動など、教科学習以外の面においても大きな効果が期待できる。

さらに各教科でも、例えば、国語の「話すこと・聞くこと」において自分の考えを話したり聞いたりする活動が活発になり、思考力・判断力・表現力の向上が図られることが期待される。また体育の中・高学年「表現運動」において、身近な題材の特徴を捉えて、そのものになりきって全身の動きで表現したりする活動は「表現コミュニケーション」そのものである。つまり、主体的・対話的で深い学びを

実現していく各教科の学びに、この「表現コミュニケーション」教育は、基盤になるだけでなく、それを実現していく上で重要なツールにも成り得ると考えることができる。

(4) 教育継続の今後の展望

次年度以降も徐々に対象学年を増やして、中学生や4年生などに拡大し、継続的・体系的に「表現コミュニケーション」教育を実施していく予定である。ただし、そのためには適正な効果測定等が必要であり、その効果や意義について、学術的に調査・研究をしていくなどの対応が必要だと考えている。

4 「『私たちの学校』づくり」について

(1) 軽井沢オープンドアスクール設置へ

長野県教育委員会は令和6年度前期に「信州オープンドアスクール創造会議」を主催し、軽井沢町も参加する中、多様性を包み込む学校長野モデルの論議を深めた。この構想は、長野県初の「学びの多様化学校」と「夜間中学」の開校を目指し「多様なニーズを包括したインクルーシブでフレキシブルな学校」を創造するという内容であった。軽井沢町はこの構想や理念に共感し、令和6年10月末、町内に同スクールを設置することを県内で初めて表明した。

令和9年4月開校を目指して、設置準備会議を組織し、令和7年3月から令和8年3月まで七回の設置準備会議が開催された（写真3）。令和8年度には既存施設の改修を行い、学校施設の準備や学校説明会など、生徒募集に向けて準備を進めている。



写真3 軽井沢オープンドアスクール（仮称）設置準備会議

(2) 既存校のさらなる魅力化の推進

設置準備を進めるうえで大切にしていることは、既存の学校を、より魅力的にすることを並行して進めていくことであった。そこで、町では軽井沢オープンスクール設置に向けて、児童・生徒や保護者に向けての最初のアンケートを「『私たちの学校』をつくるアンケート」と名付けた。そのリード文を「軽井沢町では、あなたもまわりの人も、自分らしく学び合うことができ、自分たちが望む学校を自分たちでつくっていきける『私たちの学校』を目指していきたいと考えています。」とし、児童・生徒が学校の主体であり、すべての児童・生徒の多様性を包み込む学校への転換を目指すこととした。実際に、既存の学校文化も大きな変化を遂げつつあり、様々な変革が行われている（図2）。

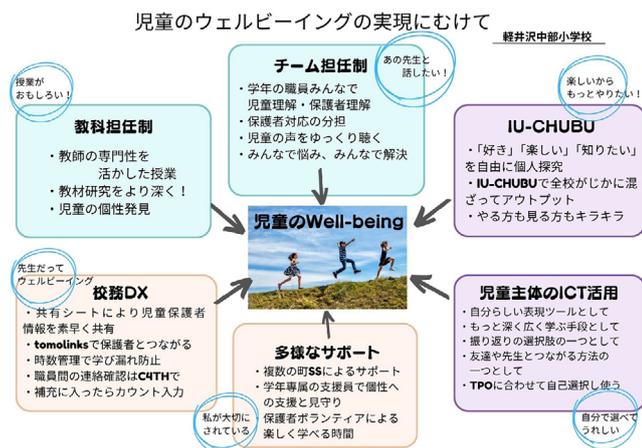


図2 軽井沢中部小学校の様々な変革

(3) 『私たちの学校』づくりについて

軽井沢オープンスクール（仮称）設置準備会議における議論や新しい学校づくりの理念・仕組みなどを既存の町立学校にも導入することで、さらなる魅力化を図る取組も始めたことで、軽井沢町では、この軽井沢オープンスクール設置と既存の学校のさらなる魅力化を並行して行う取組全体を、そのアンケートの名前から『私たちの学校』づくり」と名付けた。

現在、町では、アンケート結果を踏まえ、保護者や教育関係者を巻き込んでフォーラムやワークショップを開

催し、いくつかの実践も行っている。例えば、軽井沢中学校では、「友達と休憩したり交流したりできる場所」や「自分たちが楽しめる行事やイベント」等を望む意見が多くあったため、PTAや地域住民、町教委の協力を得ながら、生徒自身が「カフェ」を企画立案し実現させた。当日は多目的室を「よりみちカフェ」（写真4）と名付け、ボードゲームや飲料の提供など6つのブースを設け、来場者に自由に立ち寄ってもらった。当日来場した地域住民やPTAからは「とても良い取組だった」等の好評をいただき、実行委員の生徒からは「自分たちが考えたことや提案したことが、実現でき、やりがいを感じた」等、手ごたえを感じた様子だった。



写真4 「よりみちカフェ」の様子

5 おわりに

令和7年度「表現コミュニケーション」授業の最後に、ファシリテーターが「この授業ってどんな授業？」との問いに、児童たちは「正解がない!」「何を言ってもいい!」と元氣よく答えていたのが印象的だった。そこには、自分の発言や解答が正解かどうか不安の中で学ぶ子どもたちの姿はなく、心から楽しそうであった。学校という学び舎を、今一度子どもたちの笑顔があふれた空間に生まれ変わらせたいとの思いで『私たちの学校』づくりを進めていきたいと考えている。この事業は、既存の学校文化に大きな転換を迫るものであり、一筋縄とはいかないが、すべての子どもたちのウェルビーイング実現のために推進していく所存である。